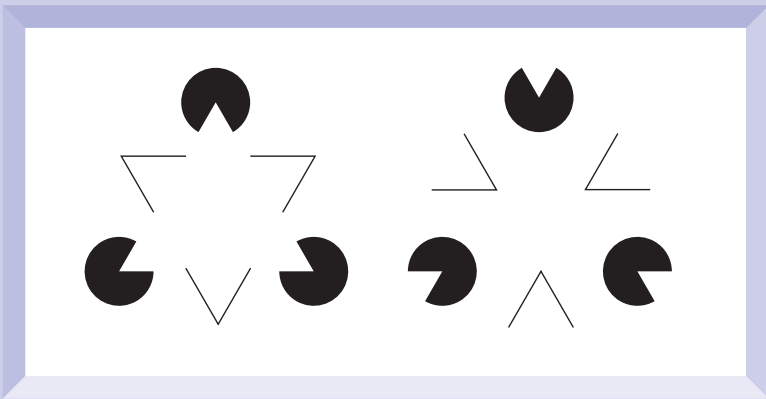
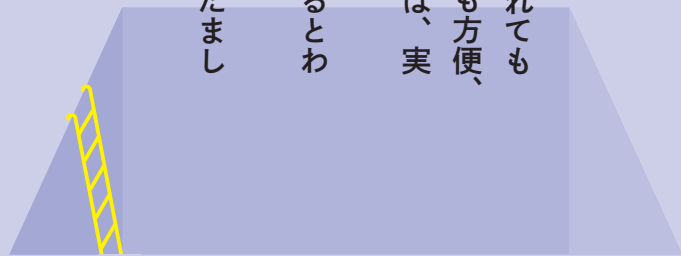


# だまし、だまされ

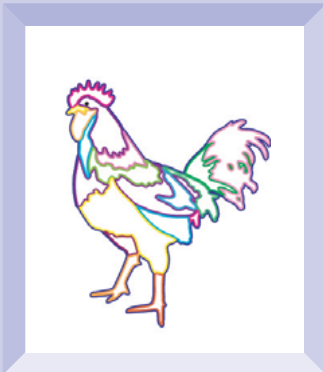
4月といえばエイプリル・フル。ばれてもご愛嬌で笑えるだましもあれば、嘘も方便、やさしい偽りもある。たちが悪いのは、実害をこうむる詐欺やデマ。

人はなぜだまされるのか？ だまされるとわかっていてもだまされたいのか？

さあ、種も仕掛けもございませぬ。だましのトリック、ごろうぜよ。



カニツアの三角形。左図中央には白い三角形があるように見える。右図と左図の中央部を比較すると、左図の方がわずかに明るく感じられる



水彩錯視。この鶏は線の部分だけに色をつけているにもかかわらず、白地部分にも色が拡散して見える(著者オリジナル)



フレーザーのらせん錯視。うずまきがあるように見えるが、ここに描かれているのは同心円である

誰があなたを一番だましているか

藤田一郎

大阪大学教授

「見える」というできごと

「自分の目で見るまでは信じない」ということばがある。到底信じていけないような突拍子もない話を聞いたときに発せられることばだが、そこには、「この目で見たいものは確かだ」という前提がある。これは本当だろうか。外界世界は目の奥にある網膜に映し出され、そこで光の情報は神経細胞の電気信号に変換される。「見える」という心のできごとがこのときに生じるのであれば、網膜に映っているように世界は見えるはずである。ところが、網膜に映るものとわたしたちに見えるものあいだにはしばしば乖離が生じる。

その顕著な例が錯視である。ある種の特殊な図形を見ると、紙に描かれた図が動いて見えたり、何も印刷されていないところに輪郭が見えたりする。このことは、「見える」というできごとは網膜で起きるのではなく、脳が網膜からの情報を加工した後に起きることを意味している。

錯視図形を見ているとき、わたしたちの脳は網膜像に厳密に従わず、示された図形と違ったものを心のなかに作りあげたのである。

手ぶれのひどいビデオ画像を見ていると気持ちが悪くなる。しかし、ふだん網膜に投影されている外界像は、手ぶれビデオどころではない激しいぶれをもっている。というのは、わたしたちは無意識のうちに、一秒間に二、三回、すごいスピードで目をあちちに向けたり、こっちに向けたりしているからだ。それなのに、見えている世界はびつたり焦点が合い、しかも静止している。この場合もまた脳は網膜像に忠実ではないわけだが、そのおかげで、気持ち悪くもならないし、世界は静止しているという正しい解釈もえている。

わたしは、わたしにだまされる

信じがたいことに、わたしたちはほんの数秒前に見たことを画像として覚えていない。この驚くべき事実を示す変化盲という現象がある。たとえば、カードマジックをしている様子をビデオにとる。その際、カードを大写ししているほんの数秒のあいだにマジシャンが服を着替えても、カメラがマジシャンに戻ったとき、ほとんどの人は服の色が変わったことに気がつかない。「自分の目で見たものは信頼に足る」といえたものではない。目には映っていたはずなのに、目の前の人が二、三秒前に何色の服を着ていたかさえも不確かなのだ。

虚実ないまぜの世界を心のなかに作り上げ、「見えているように世界がある」と思わせている張本人は、わたしたちの脳である。わたしたちをもっとも頻繁にだましているのはわたしたち自身なのだ。

# ひとはなぜだまされるのか

— 切っても切れない社会と詐欺の関係

荻野 昌弘  
関西学院大学教授

## 詐欺師の手法

電話で息子などになりすまし、銀行口座にお金を振り込ませるオレオレ詐欺。最近では、警察官を名乗り、キャッシングカードや現金をだまし取る手口が増えているという。テレビなどで、詐欺の手口について、さまざまな報道が流されているが、なぜだまされるひとが後を絶たないのだろうか。

トーマス・マンの小説『詐欺師フェリクス・クルルの告白』のなかで、詐欺師クルルは、誘惑されたいという欲望は、神が人間に与えた普遍的な欲望であると主張する。もし、そうだとすれば、われわれは誰しも詐欺師の仕組んだ誘惑のわなにはまってしまいう危険がある。とはいえ、誰もがいつ



なりすまし詐欺への注意をよびかけるチラシ。全国銀行協会は、金融犯罪の防止を啓発するポスターやチラシなどを各銀行に配布・掲示している(提供・一般社団法人全国銀行協会)

もだまされるわけではない。だまされる理由があるはずである。

じつは、同じ詐欺でも、詐欺師が息子になりすますパターンと警察官を名乗るパターンではタイプが異なる。前者では、息子は「会社の金を使い込んだ」あるいは「借金の保証人になった」ことになっており、親は息子を助けたいと思うあまり、だまされてしまう。後者では、「振り込め詐欺の犯人を逮捕して、あなたの口座が使われていたことがわかったので、銀行協会の者を向かわせる」といい、協会職員になりすました男が、キャッシングカードを受け取り、預金をすべて引き出してしまふ。この場合、助ける(ふりをする)のは、詐欺の被害者ではなく、詐欺師のほうである。

## 詐欺と救い

ただ、いずれの場合にも、被害に遭っている者を助けるという物語が背景にある。つまり、詐欺に遭うのは、窮地におちいった誰かを救いたいときか、救ってもらったと信じ込み、たいへんありがたいと思うときなのである。

もうひとつの特徴は、詐欺師が語る(騙る)物語では、助ける立場にあるのは、社会のなかで助

ける責任があるとされているひとびとだという点である。親は子を助け、警察官は市民を救う責任がある。詐欺師は、社会的責任を果たすよう促すか、みずから果たしているよう装うことで、ひとをだましていくのである。ひとびとがそれぞれの立場に応じた責任を果たすことで社会が成り立っていることを、詐欺師は直感的に理解しており、この理解に基づいて、ひとをだますしかけを作り出す。

## 詐欺の比較文化

誰が、いかなるときに誰を救う責任があるのか。それは、倫理や宗教と深くかかわっている。また、法や家族制度とも結びついている。宗教、法、家族制度が時代や社会によって異なる以上、詐欺師の戦略も、時代や社会によって差が出てくる。

民俗学者の宮本常一は、『忘れられた日本人』のなかで、文字を読めない村人たちは、詐欺の格好のえじきになったと指摘している。それは、村人たちが、「人を疑っては生きて行けぬものであった」からだという。それでは、文字を習い、真と偽を明確に区別する習慣が身につけば、詐欺がなくなるのかといえ、そうとはいえない。『方法序説』のなかで、すべてを疑ったあとに疑う自分だけはたしかに存在すると気づき、「われ思う、ゆえにわれあり」と説いたデカルトを生んだ合理主義の国フランスでも、なりすまし詐欺は頻発している。たとえば、電話による詐欺(仏語でFraude téléphonique)は、日本同様頻繁に起こっており、公共機関なども注意を喚起しているが、被害者が減る様子はない。詐欺はどこにでも生まれる。そして、詐欺師たちがどのような戦略を立てるのを見ることができるのである。

# 騙される人類学者

丹羽 典生  
民博 民族文化研究部



フィジーにおけるカヴァのひととき

人類学における調査は、対象となる人びととのあいだに築いた人間関係から情報を入手するため、どこか科学的方法として割り切れない側面がある。話を聞き出すとする調査者と、語る現地住民の化かし合いという側面がどこかに孕まれていて、騙された人類学者の筆頭として話題になった人物といえ、マーガレット・ミードであろう。彼女は、『サモアの思春期』において、アメリカの若者が思春期において感じる性に関して抑圧的なストレスからサモア人は解放されていると唱えて、文化人類学者として一世を風靡した。ところが、一九八〇年代以降に出版されたデレック・フリーマンの研究によると、彼女のサモア文化論は、当時の文化決定論の型に調査データを当てはめたものであること、さらには、データについても、信頼性に欠けるような、たとえばサモアの人びとの冗談を真に受け取った節があるというのである。

調査前に、両者の論争を読んだわたしは、前者はともかくとして後者の冗談云々の部分についてはいまひとつ腑に落ちなかった。漠然とはあるが、いくらなんでもそれくらい見当がつくのではないかと思ったのだ。ところが、ミードと同じ南太平洋の島国で調査滞している際に、ミードに同情を感じたく

なる瞬間に多々遭遇した。フィジーの村のなかではカヴァという伝統的な飲み物を囲んで日夜あることないこと話すが通例となっている。そうした席はよき情報収集の場でもあり、わたしもそのため足繁く通った。ところがそうした席で、フィジー人は真顔で冗談を言うのである。

たとえば、ある夜のカヴァの席で、村長に会いたいと相談をもちかけたことがあった。ある人が車座に加わっていた青年を指さしてこれが村長だと真顔でつぶやくと、まわりの人たちもそれにあわせて彼が村長ということを前提に会話を続ける。村長といわれた本人はにこにこしたまま何も言わないという場面が何度もあった。あとでわかったことは、その青年は村長とはまったく縁もゆかりもない人物で、仕事がないために、始終村のなかでふらふらしていることで有名なだけであった。

滞在が長くなると、この冗談のおもしろみもなんとなく理解できるようになるのだが、当初はからかわれたように愉快ではなかった。もつとも日本人の知人に言わせるとフィジー人の性質というよりは、類は友を呼んだだけということらしい。フィジーの文化と関係しているのか判断するにはもう少し時間がかかりそうである。



# 見世物小屋の呼び込み口上

— 舌先三寸でコマす

鶺鴒 正樹 京都文教大学教授



裸電球に照らされた「たこ娘」「かに男」の絵看板

着物を着て、髪の毛をアップした小太りのおばさんが、タオルをかぶせたマイクを片手にがなりたてていた。スピーカーを通した野太い声が、ガンガンと頭にひびく。

「それではこのお姉ちゃん、ウソかマコトか、帯が解かれ着物が脱がされ、全裸、まるの裸で立ち上がる。この不自由な足取りで、今から歩くところからまず見ていただきます」

一九八八年一月、西宮神社のえべっさん。身動きひとつできないような人ごみをかきわけ、やつとこのことでたどりついた見世物小屋の前で、呼び込みをしていたのが、安田興行社の安田春子さんだった。

## コマすとガマすのあいだ

春子さんの頭上では、「たこ娘」「かに男」と大きく書かれた絵看板が、裸電球に照らされていた。カニの甲羅を背に、こちらをふり向いた男の顔はなぜかバタ臭く、着物姿に日本髪で白い歯をのぞかせてほほえむ娘の足は、畳の上にくぐりやりと伸びている。

もちろん、こんなタコ娘やカニ男が見世物小屋のなかにいるはずもない。にもかかわらず、たお客さんから石を投げられて、つぶされた小屋もあつたらしい（安田興行社ではない）。

## お客さんとのかけひきのおもしろさ

じつさい、安田興行社の見世物小屋では、だまされたから入場料をタダにしろ、などと毒づくお客さんはいなかった。小屋のなかのタコ娘については、企業秘密でもあるのでくわしくは書かない。まあ、そんなふうに見えなくもないかな、というぐらいのものだ。小屋に入ったお客さんは、しばらくタコ娘を気にしているが、そのうちに舞台で演じられる人間ポンプや犬の曲芸のほうに見入ってゆく。そして、それなりに納得して、入場料を払い（見世物小屋は「お代は見てのお帰り」方式）、小屋を後にする。それは、人間ポンプというインパクト充分な出しものに納得したからでもあろうが、タコ娘の存在を期待してしまつたお客さんの側にも、春子さんの口上に「コマされた」共犯者意識のようなものがあるのではなからうか。

小屋のなかで人間ポンプを演じていたのは、ご主人の安田里美さんである。碁石を飲み込み、注文に応じて色や数を自在に出し分け、金魚を飲み込み、生きたまま出す、ガソリンを飲み、大きな炎を噴き出す、といった摩訶不思議、迫力満点の身体芸だ。

里美さんは一九九五年、七十二歳で亡くなった。里美さんの死後、安田興行社はお化け屋敷の興行が中心になり、見世物を興行す



安田春子さんの口上に集まる人びと

に来ることも、「コマす」といわれる。「説得し、納得させる」というニュアンスが、「だます」よりも強いよつなのだ。

おもしろいことに、見世物小屋では、たちの悪いウンをついてだますことは「ガマす」といって、「コマす」と区別している。たとえば呼び込みで「いま美空ひばりが見に来てます」という。ドットとお客さんが入る。しかし美空ひばりはなかにいない。お客さんが文句をいってくる、「すみません。もう出て行きました」。あまりの「ガマす」手口に、怒っ



着物姿で呼び込みをする安田春子さん

ず、けたたましく鳴らされるベルの音にせかされるように、お客さんは小屋のなかに吸い込まれていく。

見世物の世界では、春子さんのように、口上でお客さんを小屋のなかへ誘い込むことを「コマす」という。因果の物語にのせ、絵看板に描かれた生物学的にはありえない存在が、小屋のなかにいるがごとくに、口上で語る。それは、はっきりいえば、お客さんをだますことである。

ただ「コマす」は、「だます」とは微妙にちがう。たとえば、テレビ局から出演の交渉することはほとんどなくなった。お化け屋敷でも春子さんは呼び込みを担当している。あの野太い声は健在だ。

しかし、お化け屋敷の呼び込みはもの足りない、春子さんはいう。「滑稽怪談、お笑いお化けの会場はこちら」「お化け見る人はよおいで」といった同じフレーズを繰り返すだけのお化け屋敷の口上では、目の前に集まつたお客さんを「コマす」腕の見せどころが少ないというのだ。

舌先三寸、「ガマす」手前で寸止めする。あの春子さんの名人芸を、もう一度聞ける日は来るのだろうか。



火を噴く人間ポンプ・安田里美さん



# 世界のトリックスター、大集合!

秩序うっちゃり、規律もほっぽり。

ぺてん、冷やかし、とんちに諷刺。いかさま、さかさま、困ったやから。  
それでもなぜだか、憎めない。天下御免のいたずらもの。



## ワタリガラス

ワタリガラスの仮面  
カナダ 民族：クワクワカワク  
標本番号 H0009848

私は北アメリカ北西海岸地域の創造主であるワタリガラスだ。お前たちやお前たちが食べる鳥獣や魚を創りだし、狩りのやり方を教えたのはこの私だ。むかし、お前たちは私を尊敬し、私の仮面を作り、儀礼をし、正しく生きたものだった。だが、最近はず私を敬わず、美女の尻を追い、ねたんだり、喧嘩をしたり、だまそうとばかりするのだ。何、お前たちは私の真似をしているだけだ。ちがう、この私がお前たち人間の真似をしているだけだ。  
(岸上伸啓 民博 研究戦略センター)

わしはバダルチン。モンゴルの民話に登場する托鉢僧(たくはつそうじや)じゃ。歩いて旅をしながら人の家で食にありつく。「ええ、不思議なことがあるもんだ。ところ変われば、しな変わるというけれど、キビの煮立ちまでちがうとはね。うちのほうでは、キビは押し合いへし合いけんかをするもんだが、おたくのほうでは、離ればなれになつて呼び合ってるよ!」ひねくれもんのわしにこう言われて、クスッと笑っておかわりを出すか、むかついて追い出すか、それはあんだ次第じゃよ。  
(小長谷有紀 民博 民族社会研究部)



バダルチンは、こんなふうには野宿することもある  
絵画「モンゴルの一日」(模写)より  
モンゴル 標本番号 H0224333

## バダルチン

「笛の音が響く〜」。わしの名はスマル。ジャワ島の伝統音楽ガムランを聴くと、ついつい踊りだしてしまふんじや。わしが登場する人形芝居ワヤンは、無形文化遺産にも指定されたと聞いとるぞ。わしが醜(みにく)いって? ぶだんはおかしなことばかりやつとるが、じつは人間界をまもるために天界からおりてきたんじや。わしの主人たちは、ピンチになるとわしの助けを求めろぞ。あく、いい加減、おろかな人間はほつとして、昔の美男子にもどりたいもんじや。  
(福岡正太 民博 文化資源研究センター)



スマルの影絵人形  
インドネシア  
標本番号 H0004143

## スマル

俺は16世紀ごろイタリアで生まれた仮面即興劇コメディア・デッラルテの人気者、アルレッキーノ。道化師、ペテン師などとよぶ者もいるが、俺の仕事は、偉そうな軍人、金持ち、学者さんたちの化けの皮をはがすこと。その手際に観客はいつも拍手喝采(かっさい)だ。現在のイタリアでも、俺の後輩にあたるコメディ俳優やお笑い芸人が政治家たちをおちよくっているとか。でも、今の政治家のなかには俺様も顔負けのペテン師もいるからねえ。がんばれよ、後輩!  
(宇田川妙子 民博 民族社会研究部)

アルレッキーノ  
Maurice Sand, *Masques et bouffons (Comédie Italienne)*,  
Paris: Michel Lévy Frères, 1860より



## アルレッキーノ

オイラはずるがしこいネズミ。ある日、陸ガニと一緒に航海に出たんだが、食べ物と占めにするオイラへの仕返しで、カニはカヌーに穴をあけて逃げやがった。おぼれるオイラをみかねて、タコが頭にのせて島へ運んでくれたが、あんまり見事なつるつる頭なんで、ちよいとひっかいてやったんだ。はげ頭をあざ笑われたタコは、今でも海のなかでオイラを待ち伏せしているらしいよ。  
でも、ちやつくものに飛びかかるタコの習性を知って、ネズミ風の擬餌(ねずみご)針(はり)をつくった人間のほうが、オイラよりずっと「ずるい」と思わないかい。  
(須藤健一 民博 館長)



ネズミを助けるタコの木彫  
トンガ  
標本番号 H0004757  
※ネズミ風の擬餌については、本号10-11頁「似たモノさがし」にて紹介

## ネズミ

## ヤヤイ



ヤヤイ  
仮面は、隣国ナイジェリアで購入したアメリカ製の布製怪物マスクに後から赤いま取りを縫い付けたもの。肩にかけた袋にスリとったものをつめていく。エユモジョック、カメルーン。1996年1月筆者撮影

オレっちはヤヤイ「泥坊野郎」さ。アフリカはカメルーン、ナイジェリア国境近くに住むエジャガムだ。仮面結社オクア・アメットの仮面舞踊の場が、オレっちの「仕事場」だ。観客が、男仮面と女仮面の舞踊に見とれているうち、オレっちは踊りの場に飛び込んで、手当たり次第にスリを働く。もちろん、観客は大混乱。踊りの場は、歓声・悲鳴に包まれて、大盛り上がり。観客も皆、オレっちがスリを働くことは百も承知だから、ここはオレっちと観客のばかしの場となる。いや、仮面舞踊は楽しいぜ! あんたも一度きてみなよ。  
(吉田憲司 民博 文化資源研究センター)